

戦後七十一年目に向かって 駒田晶子

「短歌研究」十一月号の特集は「戦後七十年をふりかえる五首」。
 〈現代短歌評論賞受賞者十一人による戦後七十年を短歌から解説
 するという目論見〉と記されている。

後につづく者はなかれ と言ひおきて 発ちゆきにけり。 征き
 て還らず 岡野弘彦「読売新聞」平2711

ファシズムの影濃くなりてすでにわが帰る国にはあらず日本は
 渡辺幸一「短歌往来」平2715
 傍観を良心として生きし日々青春と呼ぶときもなかりき

なほ生きて迎ふる原爆記念日かめまひを鎮むることにもなれて
 近藤芳美『静かなる意志』
 竹山広『地の世』
 民族は運命共同体といふ学説身にしみてわれら諾はむか

三択です 気分 性欲 そして夏 夏のせいってことにしてお
 南原繁『形相』
 セトリョーシカ#ニヤーゴ水

掲出歌一・二首目は坂出裕子選。三・四首目、小塩卓哉選。五・
 六首目、矢部雅之選。それぞれの五首、そして付された文章に短
 歌観が凝縮されていて、興味深かった。「反戦・反核を歌い続けて
 も世の中はそのように動かない。むしろその逆である。」と記した
 坂出氏の文に、戦後七十年目の日本の苦さを読者と共有しよう

いう意志を感じた。近藤芳美と竹山広。青春・壮年期に戦争があ
 り、戦後を長く生きた。それぞれの作者の戦後は、まさに我々と
 地続きの戦後にほかならない、と小塩氏は文を結んでいる。高橋
 源一郎氏のスピーチ「死者と生きる未来」を要約し紹介した矢部
 氏の文も心に刺さった。昭和十六年十二月八日に詠んだとされる
 東大総長の南原繁の一首。抑制的なトーンに強大な社会的圧力を
 観て取る。近代歌壇も暗黙の「正しさ」への同調圧力に続べられ
 てきたのかも知れない、とチクリと読者を刺す。六首目は、ネッ
 ト番組の一コーナーより出された下句に、ユーザーが上句を付け
 て一首の短歌のかたちにする「付け句」から生まれた。七十年前
 には想像すらされなかったインターネット、ネット配信番組、S
 NSなどの技術。多様な人たちが歌を通じて交流できる。こんな
 短歌の現状は、いかなる「正しさ」も同調圧力も無く、自由と他
 者への寛容さに満ちていて好ましい、との結びに、意表を突かれた。
 わたしは今、作者の姿が見える作品ばかりに安心を覚えているか
 らだ。ひとつの場に出合った一首と向き合う姿勢は、現代の〈座〉
 のような感覚なのだろうか。わたしはまだ、未経験だ。

(右翼) (右翼) (リベラル) (左翼) くだらない思想本を売り生きな
 がらえる 佐佐木定綱「シャンデリア まだ使えます」平2711
 第六十一回角川短歌賞が発表された。受賞作は鈴木加成太「革
 靴とスニーカー」。「着てみれば意外と柔らかいスーツ、意外と持
 ちにくい黒かばん」。社会人未満の自分の姿を、やわらかな詩情
 と的確な言葉の選択で五十首に映し出した。次席は、われらが(?)
 佐佐木定綱さん。読者に咬みついてくるような一首もあり、さら
 ざらと整えられないままの作者像が、なんとも魅力的だった。